絵本浄瑠理姫譚五巻

浄瑠理媛物語巻五

東都　狂蝶子　文麻呂　著

○源太夫

去程に追分の宿のものどもハ、源太夫を娘なりとおもひて、雪の中を四里あまりも来れバ、夜もしら〳〵と明度ぬ、初より竹輿の中にて、からたうごかして打騒けれど、誰売るゝとても、さやうにあるべき事とおもひをり、わろき雪にのミ難儀して、娘に似げなきからたの重さにハ、心づかず、酒を売家の門明つるがあれバ、旅籠屋の下男利八、いざあたゝまらんとて、輿舁男もろとも入て酒打のめバ、すこし手足のこゞゆるも忘れぬ、扨も娘ハ、いかになりつらんとて、輿の戸明れバ、こハいかに大の男を縛りて、口くつハしてあり、酔もさめぬる計驚あきれて、まづ子細を問とて、口ばかり解てやれバ、源太夫ハうれしくて、今ハ何をかつゝまん、おのれハあの娘を隠し妻にしたりし者なり、情なき嫗が、何の意趣ありてか、かゝるうきめにハあハせつ、縄をも解て助てたべといふ、利八聞てげにさもあらん、しかし汝も同類ならんもしらず、娘を失ひし上、汝がやうなる逞しき男を放ちて、またも逃しなハ、詮議の手がゝり失なひて、第一ハあるしが勘当うけん、いよ〳〵無失ならバ、嫗を相手にいひ開きせよ、いざ嫗が所へ、此輿舁かへせといへバ、酒売

主聞て、某がかゝハらぬ事ながら、跡へかへし給ハんハ、無益の事なり、嫗といはるゝハ、姨捨の嫗にてあらん、かれハかやうに、一人の女をもて、二度まで金にせんとする、逞しきやつなり、家竈をも、かねて借ものに仕おきたりとか、よべ欺きまいらせたれバ、今朝ハいづ地へか逃失つらん、まことの盗人にまさりて、一所不住なれバ、今行給ふとも捕へ給はん事難し、折を過し、油断の時に捕へ給はんこそ、しかるへけれといふ、能こそ教たまひつれ、くやしき事ハくやしけれど、さらバまつ追分へ連れかへり、親方に告て、庄屋殿の沙汰にいたすべしとて、ふたゝび口くつわして、やがて追分へかへれバ、あるじの勘六是を聞て、出て見て大に怒り、まづそやつ打たゝけとて、棒など取出けるが、又おもひけるハ雪の折から、夜ひと夜ありきて、物もくハざらんやつ、打たゝかバ死もやせん、死でハ事むづかしからん、是も詮議の便にやならんなど、案じ顔につぶやく、源太夫其けしきを見て、頻に腮を動かせハ、咽乾ならん、湯にても水にても喰ハせよとて、口を解てのまするに、したゝか打飲ミて後、源太夫いへりけるハ、欺かれ給ひしくやしさハ、げに理ながら、我とても不運に欺かれたり、まづ其やりたまひし金、何ほどにか我いかにもかへし申べき間、

ゆるして給へ、かゝる忍びたる事なれバ、身の上ハ名のりかたけれど、我もさるべき者にて、万一の事の為に、百両ばかりの金ハ、布につゝミて、腹に巻てあれバ、これを以てつぐのひ候ハんといふ、勘六空事ならずとおもひ、縄を解せけるに、誠にうれしくて、手足さすり〳〵、そこに居るさま、色黒くきたなげにて、袖長き小袖ばかり、きら〳〵しう、なまめきて見ゆるハ、さなから古寺の鬼子母神の、こゝに現形せるがごとし、源太夫も此小袖、ぬかまほしけれど、下なる小袖ばかりにてハ、寒さこらへがたけれバ、恥がましきをしのびて、布につゝミし金、残なく取出し、嫗にとられし金を問へバ、五十両といふすなハちいふまゝにやりて、扨おのれが衣服買てたまへとて、別に十両をあたふれバ、勘六ハ其金あるに驚きて、よく様体を見るに、源太夫との見覚ハなけれど、いづれ都方の者と見れバ無下に恥辱を与へてハ、跡にて返報あらんがおそろしく、ましてかゝるすぎはひする物ハ、金銀をもて交をなすものなれバ、すでに捨つる金の、ふたゝびかへる来るを悦びて、俄に様体をあらため、いざ〳〵とて奥の出居に伴ひ、詞あらためて、扨々無礼を仕りしなり、いかにも〳〵ゆるさせ給へ、金銀ハ商人の身にとりてハ、子のように大事の物にて候が、無難にかへり候ハ、死果しものゝ、よミがへり

たる心地にて、某がうれしさいふべき方なし、さそや寒くおはすらん、炉の傍によらせたまへ、縫てある衣服なりとも、とく買て参らせん、袖長き小袖、着にくゝやおハせん、しかし長き袖よく舞ひ、多き銭よく商ひすとハ、古くよりハひならハして候、やさ男のかゝる、からき目にあひ給ふハ、いはゆる十分の顔色あるものハ、十分の折磨を受るにて候、女ゆえにかくさすらへ給ふこそ、あないたハしけれ、某ハ賜物の金の顔色を見て、十分に心ときめき候ひぬなと、おのれひとりさへづり笑ひつゝ、とく朝餉参らせよ、酒あたゝめよといひつけて、おのが部屋の方へ入ぬ、此あるじ、此頃宋朝より新に、渡したる小説を、なまわろき博士の読たりしを、なまおぼえにいひつるなるべし、今も其類多し、やがて飯をかき酒打のミ、扨衣服も来りて、着かへつれバ、初てもとの源太夫になりぬ、是よりいよ〳〵客人のあしらひなり、かくてよべのつかれ、しばしやすめんとて、まどろミしが、昼過て起ぬ、あるじの勘六かれが、誠に常の人さまになりたるを見てわざと酒いたくしひて、酔すきたる、頃ほひ、いひけるやうハ、君折角の恋叶ハせたまハず、口惜き事なり、某が方にも、（傾城）けいせいあまた候へバ、飢饉の折の芋粥ともおぼして、そひぶしせさせ給ハぬかと、いはれてすこし心動き、そハ

よからんなどいひつゝ、湯屋へいくに、奥の一間に女の泣声すなり、あやしとおもふに、かけがねかけてあり、透間より、わずかにのぞけハ、瑠理君の妹の白糸なり、柱にそばミてうつむきたるがおもひなしにうつくしう見ゆれバ、いぞぎ座敷にかへり、あるじの勘六をよびて、あの一間に、泣てをりしけいせいを出せといふ、勘六、驚きて、いかであのやうの、醜くきものを、相手にハなさせ給ふべきといへバ、源太夫ハまだ客人に出さねバ、我には惜むなりとおもひて、初めて男に逢ふ女、好ましくて、ひたすらにいへバ、勘六も是非なくて、しバらく打案じけるが、かれハ見給ふごとく、折檻して候へバ、泣顔つくろハせ候ハん、君にハ暮ぬほどなから、まづ御ふしどへいらせ給へといふ、源太夫女といへバ、例のいふまゝになりて、閨へ行て待つ、そも〳〵さいつ頃、白糸が売れしハ、此さきの家なりしか、兎してもかくしても、けいせいの奉公を嫌へバ、ふたゝびここに、売られしなりけり、かくても猶、旅人の添ねせよとて、あるしの云つけ厳しけれバ、所詮たゞ事にてハ、つひにハあらがひ得じ、さりとて命失ハんも無益とおもひ、鉄筋をやきて、顔に疵つけけるに、おもひの外に、其疵うミ爛れてけれバ、あるじハ大に怒り、かうなりたる不用のものほし殺してくれんすとて、一間に篭ておきけるが、源太

夫が乞ふに任せて、けふハゆるして一間を出しつ、白糸も物くハで死んハくちをしく、かく醜くなるからハ、身を穢さん心づかひあらしとてうけがひけり、されど座敷の、ものあざやかなる所へハ出しがたくて、閨へとハいひしなり、白糸装束着かへて閨へゆけバ、源太夫姨捨の折にも懲ず、白糸の君はやうといふに、白糸早く源太夫が声ときゝ知りて、顔打あくる其醜き事、まことにたとへんに物なし、こハそもいかにと驚ろけども、白糸なる事ハしら糸なり、わさ〳〵疵つけたりと見、腹立どもおのが乞ひし事ゆえ、なにともいひ出んことなかりしに、白糸もまた詞もまじへず源太夫暫し物いはでありしが、ひとつのはかりことを考がへ出てそこを出で、あるじの勘六を物影へまねきて、ひそかにいひけるやうハ、今ハ我名をもらしぬべし、われハ海道の目代、源太夫といふ者にて、あのけいせい白糸といふは、矢矧の長者が娘なり、われかれが姉の浄瑠理を、見ぬ恋にあこがれてありしに、嫗が宿にて思はづも逢瀬ありしを、嫗がしわざに妨けられて、此やうにさまよひ来れり、浄瑠理ハ嫗が為に、いづくへか売れけん、あり家尋ねがたし、兄弟ゆえに、あのしら糸をとおもひてせちに乞ひて見たりしに、げに醜くなりたり、そも〳〵人ハ似しといひしかど、嫗か所にて

見し浄瑠理にハ似もつかず、疵つきて醜なりつれバ其相のかはりしならん、それについて計といふハ、浄瑠理が着なれし小袖、わが着て来りしがあり、それを白糸に着せて、矢矧の長者が方へつれ行、金にかへんと思ふなり、只物いはれてハ事ざましなれど、それハわが家に伝へたる、瘖にする薬あれバそれを飲せて、物たにいはずバ、いかなる父なりとも見違へん、さて大事のいつき娘なれバ、今ハ売物になりたり、千両たまへといふに、いなとハいはじといふ、慾心ふかき勘六大ひに悦びて、いミじき計略なりといふに、源太夫まづ我に瘖の薬の料百両おこせ、扨千両とりなバ、其内を、わづかに百両くれよといふ、天雲目あてにするやうに、うきたる事ながら、財に心くらミて、勘六ハさし引て、すべて八百両の得分とおもひ、あはれや欺むきて、白糸に件の薬のませ、かたはとなして、かの紫のきぬをきせ、扨例の竹輿にのせて、矢矧をさしてぞのぼりける、まことやかの瑠理君の入水の難を救しハ、牛若丸の臣下となりし、喜三次にてぞありける、いにし頃、牛若の御供叶はぬを、本意なき事におもひて、跡追参らせ、執田の大宮司がもとへくだりけるに、牛若丸衣の里より、元服すとて来給ひし折にて、かれが志しふかきを感じたまへども、猶御供ハゆるさ

れず、喜三太御調度など、あけて見るとて、瑠理君の人形を見つけつれバ、喜三太ハ外ならぬ者とて、瑠理君の事をも語り給ひ、やがて牛若丸ハ元服して、左馬の九郎と名乗て、木曽へ下給ひ、喜三太はふたゝび、都へのぼりてありけるに、牛若丸木曽にての語らひも、とミに出来ねバ、上野へいきて後、是も忍びて都のほりし、山科に居給ふ其跡なれバ、伊勢の三郎が木曽への仕も、いたつらになりしなり、喜三太とく山科へ参りて、さま〳〵に打語らふ、此頃吉次も帰りのぼりて、三郎瑠理君ふたりが物語、白糸が行衛知れぬ事も、一部始終かたり奉れバ、牛若丸大に驚き、あハれがり給ひ、葬送のまねせし事だに知らでありき、我ゆえにさま〳〵にさすらへけるぞ、我ミづからとはんと思へども、都の内の源三位殿、物たくまるゝ下心にて、我を招かれたるなれバ、其やうを伺ハん間ハ、他国の下向心にまかせがたし、しかし打すておくべきにあらずとて、すぐに其明る日、喜三太を御使ひに下し給ひける、喜三太吉次が物語を聞て、道々おもひつづけけるハ、去年鞍馬寺にて、上野へ下らハ牛若丸がゆかりの者助くる事あらんと、僧正坊こそのたまひしが、御危難を救ひおくれて、吉次や三郎に手柄しられたり、いざとく下らんとて、道をいそぎつゝ下るに、獺寐川の辺りに明友ありて、問よるべき事のあれバ、それが方へ

まハりて、夜をかけて三郎が許に行くに、川辺に身を沈めんとする人あれバ、誰にもあれいたハしとて、松明の光りにて見るに、紫裾濃の小袖着たれバ、無二無三にかき抱き、とある亭へつれゆきて見るに、痘痕の御顔にておハせバ、吉次が物語にて承ハりし、瑠理の君かと問ひ奉るに、吉次といふがなつかしくてさなりとて、ありし次第物語り給ふ、いづれにも御命に及ばせ給ふべきいはれなし、いざ三郎が方へ帰らせたまへとて、御使の役とする牛若丸の御文出して見せ奉れバ、うれしくもかなしくも、泪ながら見給ひて、瑠理君のの給ひけるハ、わらハかうなりてハ、とてもかくとも、ながらへたらしとおもへど、さほどにいはんにハ、所詮死せハせじ、さらバそれハ汝が詞にしたがひて、さらに〳〵死ぬる心をバ休てん、されどわらハが心ざしをもたてよ、一旦恩ある三郎が家を出しからハ、おことが留めしばかりにて、此まゝに帰りてハ、あまりに浅はかなるやうなり、同しくハ矢矧へともないくれよ、（ママ）かしとて、打なきつゝまたの給ひけるハ、御文にハ醜なりぬども、同穴のいかでそむかんなど、いひおこし給へれども、いかゞハ逢参らすべき、矢矧へかへりて閉篭て、尼法師ともならんずとの給ふに、喜三太ハもし其心にそむかバ、又思はずなる事なし給ハんもしらず、いづれにもまづとく伴（疾）

奉らんとおもひて、げにことハりある仰せなり、さらバ三郎が方へハ知さず、ふたゝび矢矧へ御供申すべしとて、扨其夜ハ百姓の家かりて宿し参らせ、夜すがらおもひはかるに、三河の国への御門出、よかるべしと思ひなして、道をかへ明る夜ハ、長窪の宿にそ到つきぬ、瑠理君ねられたまはぬまゝに、の給ひけるハ、いかにおことハ見ざりしか、わらハ道すがらほの見し旅人の女に、わらハがやうなる、小袖きたりしがありけるぞ、若ハ白糸にハあらずや、などの給ひて、あれがなくなりしハ、追分にての事よなどかたり給ふに、喜三太承ハりて、御物語の事ながら、よもさやうの事ハ候ハじ、白糸殿（理）などてか、紫のきぬ着給ふべき、其世を忍び給ふ御身なり、さる事こハだかにの給ふぞ、白糸殿よりも御身こそ大切に候へ、其紫の小袖に見えしハ、おもひつゞけ給ふがゆえなるべしなどまうす、げにことハりなりとおぼして、ねいり給ふ、案のごとく、追分の旅篭屋勘六、源太夫とともに、白糸を瘖にして、此道筋のぼり来て、それも此家に泊り合せぬ、源太夫厩へいくとて、此座敷の前なる廊を通りかゝりしが、やさしげなる御こハねを、立どまりて聞くに、かの嫗が宿にて、すかされしにハ似ざりしかども、物語りのさま、正しう瑠理君なれバ、いかゞして盗まん、白糸の方ハ金百両、唖にする薬

のかはりにとりたり、今ハ白糸と取りかへてんと思ふ心つきぬ、すべて源太夫一旦信濃を逐電せしがらハ、世の中を忍びて、目代顔をバ隠してあれバ、権威も振ハれず、庶人のやうにてありけり、然るに夜半ばかりに、此宿失火ありとて、以ての外にさハぐ、旅人ども起たちて、行李旅篭奪ひ合て、まどふことあハたゝし、喜三太も瑠理君つれ奉りて逃出るに、忽に見え給はず、いかにと気も狂乱するに、瑠理君をバ人の勾引して、我よりさきに連れていくなり、きやつ不当の奴よとて、追かけて其男たゝきふせて、奪ひ返つ、此たゝかれし男ハ、旅篭屋の勘六なり、やがて火ハ盛りなれバ、跡をも見ずして一里ばかり来て、しハし憩て月あかりにて見れバ、こハいうに、小袖ハ同じく其姿も似たれど、媛君の御顔ハ痘痕にて、目鼻もわかぬばかりなり、是ハ疵つけたるにて、うみもしかせもし、醜きハ似たれど、姫君にハあらねバ、大に驚きて汝ハ何者ぞとて、しバし打守るに、かの女口を指ざし、扨筆とるまねすれバ、物いはれぬぞとさとりて、日記つゝる筆とり出てやれバ、女たとう紙とり出てかく、吉次が妹の白糸也、唖の薬のませられたりとて、かたはし書つゞくるに、喜三太吉次とハ知る人なり、白糸が姫君に似し事をも、ほの聞たれバ、扨々とて打なげきつゝ、折角瑠理君を救

しが、こよひ奪ひとられし事、われハ喜三太なりといふ事をもいひ聞すれバ、白糸も喜三太が名ハきゝおよびて、まづなつかしき人よとて、物いはれぬをくやしくおもひて、たゞ打なくばかりなり、私の歎きにかうしてあるべきならずとて、とも〳〵瑠理君をさがし索むれども、焼し跡なれバいよ〳〵知れず、せんかたなく、三郎が方へいかんが近けれバとて、其夜ハ次の宿へとまり、扨明の日追分をバ通らず、道をかへて板鼻さしてぞ行にける、喜三太ハ不運なる男にて、いたづらに往来のミぞしける、此時源太夫ハ瑠理君を奪て逃去、旅篭屋の勘六ハ、白糸奪ハるゝのミならず、喜三太にたゝかれしを、源太夫とおもひて、くやしさ限りなく、あたりのしるべに宿りて、捜しもとめんとぞ思ひたりける、今宵の事、さるあハたゝしき中なれバ、とり〳〵人たがへしつるも、げにことわりにぞありける、をかしくもはた哀れになん

○地蔵尊

上野の国筑摩川より、西の方一里ばかりに、鎌塚村といへる所あり、むかしより此国の人ハ、たけ〳〵しき所ありけれども、此村の者どもハ、ことのほかに仏神を信じ奉り、仏神のよりていはせ給ふ事をバ、いかなるひが事なりとも、背かぬが習ハしにてありけり、村の片隅なる方に、此頃はやる地

蔵菩薩おハしましけり、大磯のにまきらハしけれど、是も変化めきし御仏にぞまし〳〵ける、初ハ薮原の中におし篭られて、塩一皿たに誰も奉るものなかりしに、ことしの冬疱瘡流行けるに、此村の幼きものとも、幸に軽く仕果けれバ、何人のしわざにか、此地蔵尊の加護なりといひふらしける程に、ことのほかに流行て、よろしき程の御堂をたてゝ、参詣群集しけり、ある夜老たる女どもばかり篭りてありけるに、地蔵尊ものいはせ給へば、耳をすまして聞に、の給ひけるやうハ、われ幼き者を救し事其数しらづ、されども命数の極れる者ハ、仏の力にも及ず、他国にてハなくなりし者の多て、さいの河原甚混雑しぬ、あハれ十五六なる女一人奉れかし、教化してあの世へおくり、幼き者扱ひさせんとおもふなれバ、此村の者ども、子ともの助かりしよろこびに、とく女一人奉れ、あら神ならバ生贄ともいふべけれど、慈悲心の菩薩の事なれバ、命を取る事ハ同しけれど、穢土をすてさせて、浄土へおもむかするなり、われ長窪の宿にても、かくといひ聞せしかど、もどきて聞かぬゆえ、仏罰にて宿中焼払たり、かならす我詞違なとの給ふ、通夜したる者ども、大に驚き明るを待て、とく村の役人にかくといへバ、村中の騒ぎになりて、其女誰よ、かれよといへど、命召るゝ事ゆえ、誰も出さんといふ

者なし、仏罰ハおそろしき事なり、さらんにハ金にて、他国の者を求めんとて、高札をたてけるが、また其女もなし、いかゞすべきなど、日夜より合て、此頃ハ其事をのミぞ語らひあひける、其頃源太夫ハ長窪の宿にて、失火の紛れに、瑠理君と白糸とを取替けれバ、嬉しきことハうれしけれど、失火のさハきにて、其辺にハ憩ふ所だになし、静なる所にて語らハんとおもひ、道をえらまず、歩行て、此鎌塚村へつれ来りかゝる間瑠理君ハ、喜三太ならにる心つきて、ひたすらに遁れんとしたまへば、源太夫わが縛られしをりのやうに、手を縛り口くつわしてつれ来りぬ、然るにあまりに猶豫しすぎて、東の方しらめバ、年頃の恋叶ひつるに、夜明なハかひなからんとて、かたへなる樹木の陰によりて、口くつわ解てよく見れバ、こハいかに髪の結ざま、すべてのふるまひは、瑠理君ともおもハるれど、痘痕の見にくきさまハ、黒闇女といふともかくハあらじ、源太夫ハ相手に嫌ひなき、猪武者の色好なれども、さすがに忙れて、是ならんにハ、白糸が方ハ鉄火の疵ばかりにてよろしかりしに、取かへつるくやしさよとて、今ハ以の外に怒り、かくばかり骨折し事、且ハ年頃つれなかりし返報に、さいなミ、殺して腹をゐんとて、いましめを其まゝ、かしこの古木のもとにつれ行て、ことにきひしうくゝりつけ、刀ぬきてさし

付れバ、瑠理君ハいとかなしきながら、今ハ誠に前業の報ひ、宿世拙なきをおもひ明らめ給ひてのたまひける、もとより我ハ死に出し身なり、水にて死ぬ身を刃にて死ぬのミにて、死ぬにかはりやハある、殺さバ殺せとの給ふ、助よとて助くべきかとて、刀ふりあぐるあハれ、いよ〳〵死給ふべき、時の到りぬるなるべし、瑠理君常に地蔵尊をも信じ給へバ、此折も心にて念じたまひしに、夜すからありく、行脚の帰りにやあらん、打鉦の音念仏の声聞えて、ひとりの修行者たちとゞまりしが、すでにかうよとミへし時、撞木をとつて源太夫に投つくれバ、邪魔する奴推参なるぞとて、刀とる手をとゞめて、修行じやにつこと打笑ひ、全く手向ひ仕り、妨なすにハ候はず、金になる宝、失ひ給ふがをしけれバ、とゞめ申せしなりといふ、源太夫金と聞て、慾心出て刀を打置、子細いかにといへバ、されバの事なり、此鎌塚村の地蔵尊、女を教化せん、生贄のやうに備へよとのたまへバ、村の者ども金にて買んとて、高札を出したり、いたづらに殺さんよりも、金にかへ給へかしといふ、源太夫ハ出家の身の、あるまじき事とおもふに、修行者墨染の衣かたぬぎて、下に鎌帷子着たるを見せて、此やうの出家なりとて笑へバ、源太夫扨ハ盗人もする奴にて、我に劣らぬ悪者なりとおもひ、さらバ貴僧が計にしたがハん、しかし此醜さにてハ、いかで

金になるべきといふに、それにハ名方の白い物あれバ
ぬりて欺むきなん、けふ一日を過し、日の暮るを待て
あきなふべし、まづ我家へ来りたまへとて、四五町計
ある所の、茅もてふける家に連て行く、此家おもひ
しよりも狭からず、僧ハ瑠理君のいましめときて、
とも〳〵飯など認めけれバ、瑠理君の心には、われを
助け給ふ地蔵尊の化身かとおもへど、売といひし
詞をあやしく覚せバ、そゞろに身をふるハしおはす、
源太夫ハ僧が心を疑がひ、僧も源太夫がこゝろを
うたがひ、ひとりして売れてハならじとて、両人とも
に側をはなれず、逃すまじき風情なれバ、瑠理君
ハ、いよ〳〵おもひ明らめておはす、僧ハやがて白いもの
出してあたへて、化粧させ参らせ、扨日もくれけれバ、二
人してつれ行くに、源太夫慾心こらへがたく、あたひの金
せひに、我ひとりにて取るべしとおもひ、門口にて僧をや
りすこして、水もたまらず首打おとせバ、瑠理君大に
驚き給ふを、引たてつゝ庄屋が所へ行くに、途中にて
むかひより、若き男どもあまた来りて、源太夫殿にか、
修行の御僧がいひたりし、約束の女それならん、渡し
たまへといふ、源太夫驚きて、修行の僧がいついひ出たる
と問へハ、今朝のほど来り訴へて、すでに三十両の金
つかハしたりといふ、源太夫驚きながら、法師殺せし

事ハいはれず、いや〳〵さやうにハあらじ、しらぬ修行者が、かゝりあふ道理なしといへバ、いなとよ源太夫といふ人の使になりて、後に材木小屋まで参れといひしなり、こゝに金受取し、証拠の書付ありとて、出して見す、それにかけるやうハ、此女某が娘なれども、貧苦にせまりて、売渡し候、且ハ後世を願はん為なりとて、月日も源太夫が名も書てあれバ、せんかたなく、奇怪の事とおもへど、あらがふべきならず、瑠理君をハ若き男ともにわたし、まづ殺せし法師め改め見んとて、別てすご〳〵と、修行者が家の方へかえる、百姓の面々ハ、瑠理君をともなひゆきて、村長にしらせけれバ、皆悦び

て、とく地蔵尊に奉るべし、まづハ生贄のやうにとて、新らしく作りたる筥に入れ奉る、地蔵尊とハいへど、生贄召るゝからハ、変化の所為なるべしと覚すに、瑠理君のかなしさいはん方なし、さるにても殺されし法師の、訴へに行て、金うけとりしといふこそあやしけれ、初我を救ひし事よりして、おもひつゞくるに、もしハ仏の化身なるかと覚す折から、かの僧影のやうに見へて、苦しとおぼさずにいき給へ、地蔵堂にて、ゆかりの人にあひ給はん、我もまた見えんといひて、忽ち見えずなりぬ、されバいさゝかたのもしくなりて、するまゝになりておはす、かくて百姓どもハ、其箱を舁行、まづハ此事

調ひて安堵しつ、今宵ハ酒のミて、此程の労れ慰めんとて、酒肴用意したりしが、かの堂のあたりハ、肴の憚ありとて、地蔵堂にハほど隔たりし、材木小家のありけるに、莚しきて料理しつゝ、いざ皆打喰へとて、しばし酒もりしてありしに、折しも村はづれにて、新たに塗りし壁の、氷れるを乾かすとて、火をたきける、仏罰〳〵と音しけるを、恐ろしくおもふ程なれバ、それ失火にてやあらん、女が心にいり給はで、罰あてゝ、失火せしめたまふにかと、いふ程こそあれ、ミな〳〵彼火を目あてにぞかけ行ける、爰に又源太夫ハ、女とられしをくやミながら、帰らんとするに、あまり急ぎし故にや、案内しらぬ道にふミまよひ、やゝ時うつりてやう〳〵に法師が家にかへりて見れバ殺せし法師が死骸門口にハなくて、奥によく寝てをるさまなり、きやつ術者にて、うまくも欺むきけるかなとて、刀をぬきて、咽さし通し、きミよし〳〵とて、懐にある袋の金三十両をうばひて、まづ其かたハらに置、扨夕げくハず物ほしけれバいざとてあたりを見るに、酒肴あまた取ちらしてあれバ大に悦ひ、こハありがたき天の賜物、善人を捨たまはぬ所なり、おもふにあやしき法師か、不意の得分つきたる悦びに、同類よびて喰せんとしつるならん、なを程の事よしとおもひ、人もしひぬに、おもふさまにくひのミ

して、酔こゝちにそこに寝たり、是ハかの材木小屋にてあやしき法師が術にて、おのが家のやうに見せて、源太夫を化したるなり、此時かの火ハ、失火にてハあらねバ、百姓どもかへりて見るに、酒も肴も過半喰ちらしてあり、盗人めきし男、いびきかきて寝てあれバ、大に腹たちて、よく見れバ、宵に女をつれて来し男なり、こやつ、いよ〳〵盗賊に相違なし酒食もしやつが喰らひしなり、にくひ奴とて、矢庭に引起て打よ殺せよとて、散々に罵りさわぐ、源太夫目をすりながら見れバ、材木小屋にて修行者が家ならず何にまれ盗ミてくひのミせし事なれバ口こもりてをるを、多勢の者ども、ちつとも働らかせず、腹のゐる程うち叩きて、猶飽たらず、赤はだかにして、柱に縛りつけてぞおのが家々にかへりける、夜ふくるにしたがひて、寒気身にしミわたりて、源太夫ハ堪兼つゝ、くるし〳〵、助よ〳〵とて、をめきさけぶ折しも、かの長窪の宿にて、よんべ失火の折ふし、源太夫をも白糸をも、取りにかせし、旅篭屋の勘六、人々引つれ、こゝかしこ尋ねて、此小屋の前に来かりしが、源太夫かうめく声を聞とかめて入て見れハかゝるさまなり、こやつ白糸をバ、いかゞなしけんといふに源太夫くるしみにたへず、ありし次第語るまでもなく、汝か所より薬料に取りし、金の百

両も盗人にあひて、衣服ともに奪ハれぬ、しら糸もなくなしつれど、そこの法師が死してある側に、袋にいれて金三十両あれバ、せめてそれ持行て、さて代にわれを助てくれといふに、勘六まづ教ふる方を見れバ、法師ならぬ地蔵尊たふれて、側に石なこを袋にいれてあり、打明て見るより大に怒り、地蔵尊も石なごも持来て、せきたちていひけるハ、おのれ源太のわろ目代め、年ころ権威に誇るが、にくゝてありしに、うまくはかりて百両を取り、また白糸をも奪ひしな、しかし汝、ふたゝび盗賊に逢ひたるとおもへバ、頗る哀れになりしを、縛られながらも、われを嘲弄するや、まづ両眼あらバ見よとて、地蔵と石入れたる袋、つらへつき付て、見よや末世とハいひながら、石の地蔵の物いひて、引導しつる例しもなく、石を金にハ通用なさず、汝狐に化されしうへ、其相伴に我をも化するとて、又打たゝきて、よし〳〵すべきやうありとて、柱より引ほどき、地蔵の腹あハせに、つよく縛りつけて、これハ狐より伝授しつることなり、汝色好ミなれバとても、化されしつゐでに、浄瑠理とおもひて、夫婦の語らひせよ、さて此金もあたへんとて、かの石いれし袋を地蔵の首にかけ、こゝハ人目あらハなり、けさう人ハ、静かなる所にこそしのべとハきくとて、古池の前につれゆき、つき倒して

投込ミける、かくて旅篭屋の者ハ、おもふまゝにしちらして
かへりけるに、道にて源太夫が衣服、百姓ともが捨置つ
るを見つけつ、其袂に薬料にやりし、百両の金あり
けれバ、それとり返して、はしたなく追分へ帰りけるとそ、
源太夫がかゝる成果ハ、ひとへに色好の心ふかく、悪業
せしむくひなるべし、去程に夜もやう〳〵に更わたりて、
梢ならす風も、いと物すごくひゞきわたりぬ、此地蔵堂
と申すハ、此頃こそ繁昌なれ、もとより辺土の事にて、
今宵生贄めく女召るゝなれバ、通夜する者もなくて、
さひしき事いふはかりなし、瑠理君ハよんべよりして、
かなたこなたにつれられ、寒気堪難く、いはんや懐
胎の御身にてあれバ、常の人ならんにハ、病後の御名残
かた〳〵、絶入もし給ふべきを、仏菩薩の守らせたまふ
にや、恙なくておはすぞ、ふしきなる、されど筥の中
に打こめられて、牢獄のごとくなれバ、かの僧か詞とて
も、かならずとバ頼まれずとて、つく〳〵覚しつゞくるに、
いかにも地蔵菩薩にてハあらじ、猿丸などの化たるにか
とて、はや閻王の庁へ、いきたるこゝちせられてあるかな
きかにておハしたるに、遠音に横笛の声聞ゆ、例の
漢竹なりけり、此笛類ひなく、妙なる音を出せバ、いづ
地にても、聞まかふべきならず、それにて心すこし正しう
なりて、おもひめぐらし給ふにあれバ、白糸が持出しもの

なれバ、其盗人の手にやあらん、かく吹すさむも、盗人の仕わざかと覚せど、吹やう上手なれバ、牛若丸の方へ、奪返し給ひたるにや、それならんにハ、なつかしと覚したるに、しバしありて笛の音のやミけるぞ、いとあへなきや、かくて八声の鳥の、ほのかに聞ゆる頃、形ハ見えねと、箱の向ひより足音のするハ、さてこそ御仏の化物ならめと覚すほど、板敷どう〳〵とふミならして、やがて箱の蓋に手をかくれバ、今ぞ喰はれやすると、目を眠りて念じ給ふに、堂の縁にも人音してかの吹さしける横笛、またもきびしう吹たてつれバ、かの化物ハもとの所へ帰りをりぬ、瑠理君ハふたゝび笛の音に驚かれて、是ぞ修行者がいひし、ゆかりの人なるべし、助に来し人ならバ牛若君なる事、必定なりとしり給ひて、おもはずこえをあげて、やゝ牛若君にか、われを助け給へとのたまへバ、横笛ふところにして、格子の戸ねぢあけて入来り、箱の蓋おし明る時、御あかしの火てりあひて、互に顔を見あハすれバ、待こがれし牛若君なり、さいひ給ふハ瑠理ぎミなるかとの給ふ、あななつかしやとて、箱より出つゝ抱き付給ふ、其時しもかの地蔵尊声たて給ひ、見ぐるし〳〵、兄弟の和合なし給ふなといふ、両人驚きて、互に飛すさりながら、瑠理君ハおそる〳〵、猶も牛若丸の御袖ひかへて、放ちたまハず、此時地蔵尊動出給ふをよく見奉れば、

まさしくけさの暁、瑠理君を助け参らせし修行者なり、瑠理君また驚き給へバ、法師いへるやうハ、何ハ打置て、御返ハ牛若君ならず、小猿殿にこそあらめ、我こそ俗名ハ、鎌田の三郎正親にて、牛若丸に御大事勤申せし、四条の正門坊といふ者なりといふ、小猿ハ牛若丸の御方人、正門坊と聞て逃んけしきもせず、さすがにちつとも油断せず、誠か、いつハりか、はたわれ〳〵を兄弟なりといへる子細聞んとて、語られよとつめよれば、正門坊形をたゞして、いざ〳〵とて二人の者を上座にすゑめ、さていひけるハ長物語なれども聞せ給へ、某牛若君に、御大事をすゑめ申せし後、四条に帰りしに、小さき猿来り、道知るべして、鞍馬の僧正が谷へいざなひつ、扨戌亥の杉のもとにて、僧正坊に逢奉りしに、ごと〳〵く未来の事を告たまひつ、扨牛若君の東の下向、見扱ひ参らせて後ハ、僧正の御側にのミありて、仙術のかたはし、いさゝか見覚えたり、まづ僧正坊語りたまひしハ、そも〳〵小猿といへるものハ、浄瑠理の兄にて、共に伏見の中納言師仲が子なり、牛若に形の似たるよりして、誤まりて夫婦の交をやせん、汝ぢ正門坊、其事を告聞せよ、つきてハ鎌塚村の風俗、甚愚にて、流行神、流行仏を信ずる事かぎりなし、わが教へたる、少々の仙術にて、汝かの流行地蔵尊に

しばしのほど、形をかへて教化せよ、其つてにて、浄瑠理にも逢んとの給ひつれバ、過にし頃より、生贄めく女奉つれといひしハ、某が仕わざなり、かの僧正の教へ給ひし御ことバ、掌を指がごとくなれバ、源太夫が瑠理君つれ奉りたるを見て、某地蔵尊の像を代にして、殺されしとおもはせ、某ハ村長に訴へて、三十両の金とりて、袋にいれ置たるハ、今爰にハ、すべて材木小屋を、某が住家とおもハせしをはじめて、初ハ首を落され、再度にハ咽をさし通され、あるひハ袋に石のいれてあるなど、ミな凡夫の目を驚かせる、某が教化の片端なり、かやうにせざれバ、此御堂にて和殿に逢ひ参らせす、又兄弟の御事も、告んに便りあしけれバなり、和殿里若といひて、今ハ掘口の廉三が子ながら、元来ハ師仲卿の御胤なり、すでに和殿一旦、加茂川の水に溺れしならずやといへバ、小猿大に驚きて、さてハさやうの事さへ、仙界にてハしろしめされしか、今の今まで、我身ながらたゞ、掘口の子とのミおもひをりしを、の給ふなる加茂川の一件、わが身の上にあたりて、げにあやしけれバ、我もいざ語りまいらせん、まことに御子ゆかりあれバこそ師仲卿の御家人に、召れんとハの給ひしならめ、されど某が願ひハ、たゞ弓矢の道なれバ心にもあらず、連行かれしに、しきりに例の水遊の病出来て、加茂

川へ飛入つるに、水神某を穴の中に引入たまひて、汝水死の難ありて免かれがたし、それハいかにといふに、此川に身を沈めて失にし女、汝か後の父の家掘口の家に、聊かの恨ミあり、それのミならず、再び生れ出て、夫になるべき男に、汝が形の似てあれば行すえものゝ煩ひとならん、かた〳〵汝をも溺れ死なせよと、われに訴へぬ、われすでにゆるしつれども、汝家に立かへらず、件の女が讎なる熊坂張樊を殺しなバ、命助くるのミならず、後々ハ汝が願の、武士にもならしむべしとの給へり、其時某さらんにハ仰せに任せてん、定業にて死ぬべき命の助かりつるからハ、家を捨るとも、不孝にハ候ハじ、まして行末家を興すべきならハ、たゞ仰にまかせんといひけるにぞ、水中より助けられて、其後田楽などの賤しき業にもさすらえあるひハ飢寒の苦しミをもせし事、十年ばかり、熊坂張樊をねらひ候ひしに、ことしの春牛若殿の助けして、熊坂殺し候ひつ、されど牛若殿とハ名乗合ねバ知らせ給ふまじ、然るに色慾煩悩の禍となりぬる、仮初の事にあらず、おのれ此浄瑠理媛を思ひそめてより、牛若丸のおもひ人とハ知りながら、其御姿に似たるをさいはひ、忍び入て逢ひたりしこそ、我ながら浅ましけれ、其後瑠理君の行方しれすなり

にし後、おのれ信濃に下りてありしに、田楽の身にてハ、此横笛の音のなつかしくて、人手にあらんハいかにぞとおもひ、奪ひ返して扨下心にハ、伝をもとめて牛若丸に返したてまつり、浄瑠理媛に、操破らせしあやまりつくのはん、扨腹切らんとおもひしが、牛若丸の御住家もしらず、然るに此頃当国へ来り、今日地蔵堂の生贄の女、紫の小袖着てありと聞たれバ、もしはゆかりの人にハあらぬか、さらバ我恋を捨て、牛若丸の御方に、伴ひ参らすべしとて、笛吹て来りしが、案のごとく聞とがめられて、又御方人の随一なる、貴僧に逢奉りしこそ、おもはずなれ、今ハ此笛奉るなり、我ハ此世の暇たまハらん、所詮生て人に面をむくべきならず、あハれあさましや、知らぬ事とハいひながら、既に兄弟にて、夫婦の語らひせしことをとて、刀ぬきて腹につきたてんとするを、正門坊あハてゝ押とゞめ、いな〳〵御辺が逢しといふハ、此君の養家の妹、吉次が実の妹なる白糸なり、しら糸ハ御辺と約束の妻なり、瑠理君と姿似たれバ、そこにも見あやまりしなるべし、我御辺とも一面の交ハりなく、まして御兄弟の事、知るべきやうハなけれど、すべて僧正の告給ひつるなりといふ、瑠理君もよく〳〵見て、牛若丸にあらぬを知らせ給ひ兄上に忍び逢し覚なしとの給ふ、小猿もさてハ左やうに

こそ候ひしかとて、加茂川の水を出て、熊坂ねらひし時より、里若といふ名をハ、あらため形小さけれハ、小猿と名のり、五条の生れ壬生のあたりなれバ、壬生を苗字にせし事までを語る、しかし師仲卿の御種の事ハ、神仏にも知らせぬやうに、父母もいひ聞せず、世の中につゝミあれバ、兄ながら兄となの給ひそ御妹の夫なれハ、いへバ御家人とも申すべしといふに、正門坊いひけるハ、明なバ伊勢の三郎が方へ参りなん、今宵ハまづ爰にとて、生贄の筥を仮の炉になし、御あかしの火を移して、木の枝など折くべてたく、夜のものなしと小猿がいふに、それにハ此酒のミて暖まらバ、いかなる寒さも防きつべしとて、僧正より賜ひし酒壺取り出つ、ミな〳〵打のむに、げに寒気を知らず、正門房ハ仙家の事、小猿ハ嫗が宿の事、たがひにおろ〳〵語りて、牛若丸に逢給ふも、今のほどなりとて、瑠理君を慰つゝ、夜の明るを待けり、此時仙術の奇特にや、池に入しまことの地蔵尊、おのれと縄目解て、いつの間にかハ此堂に来り給ふ、正門房誠の金、三十両を入れし袋取出て、例の御くしにかけ、扨矢立の筆にてミたりに、鬼神を祭り、信すべからざる事ども、堂の壁に書付ておきけるとぞ、是もいへバ、勧善懲悪の片はしにて、教化の心いと殊勝なりき

○妹背の盃

伊勢三郎が許にてハ、瑠理君見えさせ給はず獺寐川の川下に、手ならし給ひし、御数珠の落てあるを、ひろひとり来りて、此たひそまことに入水し給ひつるなり、仕なしたりとて猶も、川下を尋ねさせしかど更に知れねバ、夫婦打歎きいたり、しかるに其あさての日、喜三太白糸をつれ来り、案内を乞へバ三郎立出て見るより大に悦び、這入兼たる二人か手をとり、其まゝ内へ請じいれ喜三太が物いふをもまたず、何人におハすかハ存ぜぬことよくも連れ奉られしとて、悦こびをいふに、白糸が物いはれぬにていよ〳〵瑠理君そとおもふ、よく〳〵見れバ、小袖ばかり瑠理君にて、おもさしハ似ながら、是ハ鉄火の疵にて、醜き筋替りたれバ又ふたゝひ驚きぬ、喜三太事の次第を語りて、面目も候ハずといへバ、三郎ハ扨も〳〵、瑠理君とおもひし甲斐なさよ、されど白糸殿にかはりしハ、せめての事なり、且ハ姫君の、一旦の死を救ひ奉りしハ、和殿が功にてふたたび奪ハれ奉りしハ、天のなさしむる所なり、されど瑠理君をうばひとりしハ、別人にあらず、ミな源太夫がする所なり、さるものゝ手にとられし、口をしさよとて、牛若の御状顔におしあてゝ、打なく、喜三太ハ、吉次が物がたりにて聞たる、三郎夫婦が、ねんごろなる心ざしを感ずるに、お

そのハ、白糸に向ひていひけるハ、瑠理君の御病気の折の給へるハ、われ死し跡ハ、白糸を牛若君に参らせよとのたまひ□とて、厚き御志しのほどいひ聞す、白糸ありがたくも、うれしくも覚えながら、顔に疵ハ出来つ、唖とさへなりぬれバ、御遺言も今ハかひなし、我さきに物くはで死なバ、源太夫が三河へつれのぼる事もなく、瑠理君に取りかへる、計も出来ざりしをとおもへど、物いふ事のならされバ、たゞたけき事ハ、音をのミなくばかりなり、まづこゝにおハして、とも〳〵源太夫を捜し候ハんと、三郎がもてなしおろかならず、其日を過さず夕つ方といふに、正門房瑠理君の御供して来れバ、此ときは誠にミな〳〵悦び奉りて、夢かうつゝかとて、先瑠理君を見奉るに、こハいうに痘痕の名残、露ほどもなくて痩たまひし折よりハ、却りてまさりたるやうに見奉る、ミな〳〵いかで、かように御ミめよくなりたまひしぞ、いかに〳〵とて、めでたき事にも、あまりの不審さにハ、せめて問ひ奉る、されどもそれハ跡にてとて、瑠理君ハ喜三太に別れて後、正門坊が助に逢し事かたり給ひ、正門坊ハ僧正の御告にて、助け奉りし事逐一かたりつゞくるに、人々もさま〳〵の艱難を経給ひしが、仏神の加護いちしるく、恙おはせぬ事を、尊とき物に仰ぎよろこび、たとへんやうなき、めでたき御宿世なりと、いはひ申す、

此時壬生の小猿ハ、おくれてまだ来ざりけり、瑠理君しら糸が手をとり給ひて、初め一所に出て、追分にて別れとなりしより、歎きあかし、其後さま〳〵とさすらへあるきて、此頃長窪失火の日の昼のほど、途中にて見給ひし事語り出給へバ、白糸ハ涙こぼすばかりにて、詞にかふる筆をさへ取兼つ、喜三太白糸が唖となりしよしを語り参らすれバ、瑠理君大に驚き給ふ、正門房それにハいミじき薬ありとて、瑠理君にさゝやきあひて、正門房門外へ立出て、しばしありて入来りて、是ハ御土産なりとて、皮ご（籠）負来りて、坐敷へすへつ、瑠理君しら糸にむかハせたまひ、今日の引出物ハ、誰かれをいはず、久しくての対面なれバ、唖を療す薬ともおもひて、おことに参らすなりとの給ふ、白糸例の、目つき顔つきにてのミ悦びを申す、其間正門房酒壺とり出せバ、瑠理君ハおそのにいひつけて、盃とり出させ、わらハ酌せんとて、酒つぎて給ふ、白糸いたゞきてのミをれバ、其盃あの皮篭にさし給へ、薬中にあり、薬ハ大切の物なり、寡住のおことなれば、夫ともおもひ給へと戯れての給ふ、里若なくなりし後ハ、似たりしゆゑにこそ、牛若丸にハ操も破らんとハしつれ、誠のかたらひならぬ、けいせいをだにせざりしし（傾城）ら糸なれバ、夫といひ給ひ、盃せよとの文字耳にとまりて、頭ふりて（振）盃はなたぬを、瑠理君しひてとらんとし給ふに、

いかに仰なりとも、是ばかりハとおもひて、御戯れことなりとも、両夫に見え候ハずと、思ハず声をたつれバ、人々唖が物いひ給ふと驚くに、皮篭の蓋、中より押あけて出なから、夫に盃せぬものやあるといふ、白糸其男をミるに、牛若丸の御面ざしあれバ、何人にておハす、牛若丸の兄君にかといふ、是小猿なれども、三郎夫婦も子細をしらねバ、驚きて守りゐたり、瑠理君ほゝ笑ミ給ひ、妹のおこと姉の夫の兄に、そふハ逆さまとおもうて嫌ふか、其心にてわらハがまねして、牛若君に逢奉りしぞといはれて、白糸顔の色あかうなりて、さしうつむきしが、誠にゆるさせ給へといふに、小猿もまたいひけるやうハ、われも其折おことをバ、瑠理君とのミおもひつるが、われこそおことがいひ約束の夫里若なれ、おことハ右りの腕に黒痣あらん、われハ左にありけるをとて、まくりでしつゝいかにそのおぼえあらんといふに、しらいと扨ハ和君ハ我夫にて、今までなからへおはしたるか、牛若丸に逢ひ奉りし、(咎)とかハなきかと、よろこふ事大方ならず、瑠理君またのたまひけるハ、されバ故を聞てハ、いよ〳〵妬むべき道理なし、われ酌せんといひしハ、改て媒にならんずる心なりとの給ふ、小猿ハ身の上の事、かたはし語りて、三郎夫婦喜三太にもしる人になりぬ、扨人々ハ白糸がものいはれし事、いかにぞと問に、顔の疵も平癒しけれハ、又大に驚く

正門坊がいひけるやうハ、抑此壺の酒ハ仙家の物にして、僧正坊より、用ある事あらんとて給ひしものなり、されば
まづ白い物に加へて、きのふ瑠理君につけさせ奉り、又
よんべ寒気を避るに、事つけてのませ奉りしかば、
かた〳〵にて御顔ハ、かうもとのさまにかはりしなり、しら
糸殿も、今夫婦の盃のたゞ一盃にて、よく其功をなしつ、
すべてミな此酒の奇特なり、皆々いざのミ給へしかし、齢に
ハ定まれる数あれど、無病にておはすべしとて、かの僧正
坊の菊の仙家をまうけたまひ、色々に悪党どもの心を
迷ハせて、帰服なさしめ、扨鞍馬山へ壺にいれて蓄はへ、
百日を経て酔のさむる頃、罰し給ふ事、また瑠理君の前
因、小猿が命を全うして、末ながら助となりぬべき事
など、くハしくいひ聞せ奉りさてむすぶの神の事をも
語りて、かの白き玉の男女双ひありて、今一双の白き
男女、それに似たりしといふ、昔語までくハしく語り聞
こゆれバ、瑠理君ハ更なりありあふ人々も感じ、驚か
ぬものハなし、此時正門坊人形の事をも、僧正のの給ひし
やうも、また顕に見し事ども、一々に語りけれバ、三郎や
がて、牛若丸より預りたる筥を取出しつ、これハ鎖おろ
してあれど、あまりに不思議なる事なれバ、あながちに
ひらき見るに、げに紫のきぬ着せし人形あり、瑠理君の
御姿にいさゝかも違ひなけれど、たゞ衣服水にひたり

たれはにや、色うつろひ顔紫色にかハりて、腹の所裂てあり、扨其傍に髑髏あり、大方ならバ、あないまハしとも覚すへけれど、御前生のかりに宿りたる名残とて瑠理君てづからとり見給ひて、さるにても薬師如来の御加護をぞ、尊ミ仰きたまひける伊勢三郎いひけるやうハ、媛君の御媒ながら、小猿殿白糸殿、こなたにて婚姻し給ハん事いかゞなり、其故ハ白糸殿の養ハれ給ふ親君の長者殿も、実の兄君吉次殿もおはせねハ、白糸殿を娵入らせ給ふか、又小猿殿聟にとり給ふか、其程はかりかたし、且ハ都の親君、堀口殿に、小猿殿のなからへ居給へる事しらせ参らせ、扨こそ改めての婚姻をバなし給ふへけれ、まして瑠理君の御男君、牛若丸下し奉りての上にて然るべし、されバまづ矢矧へ参らせ給はんか、しかし源太夫め又もさまたげやすらんといふに、正門坊聞もあへず、其事ハ心づかひし給ふな、源太夫男をバ、追分の旅篭や勘六が手を□□て古池へ水葬させつと、よへ僧正坊の夢のやうに告給ひしといふ、喜三太もまたいひけるハ、さも候ハん、某も道すがり聞候ひし事あり、信濃に下りける目代、某廉直の侍にて、源太夫が姦曲を、小松殿に訴て後、此頃源太夫が闕所の領地ども、かの目代に給ひしよし聞及びつといふ、今ハ何事も心安しと、瑠理君三州へ登らせ給ふ、小猿夫婦御供す、とり〳〵うれしき事限り

なし、正門坊喜三太も警固し奉る、此度ハ晴れての御旅行といひ、ことに武勇の者とも附添奉れバ、たのもしくぞ見えたりける、三郎ハ当時世間落居せされば、遥々の御供、口をしながら仕がたしと申せバ、是迄の芳志何の不足かあらん、追て登り給へとて、ミな〳〵夫婦の者によろこびをいひて、別れて門出し給ひけり、同し旅路ながら、うれしきにハ、すこしの苦患もなきやうに、たゞ日数はかり心もとなくて、やがて三河の国へ帰りつき給ふ、矢矧の家の内ハ、天女の天くだりたるやうに悦びあひ、長者ハいふも更なり、局の左近がうれしさ、筆にもかきとるべくもあらず御手をとり涙をこぼし、悦び泣きになく、人々も我に人よとて、瑠理君の御袂にすがり、白糸が袖をひかえていさゝか御側をはなるゝものなし、帰り給ひし二人の方も長者が膝ちかうよりて、うれしきにも、不孝のわひにも、取まじへたる御涙なり、長者とてもあまりのうれしさにハ、物もいはれで泣にけるが、しばしありてこそやう〳〵に互の物語も出来にけれ、正門房喜三太、おの〳〵名のりして、扨小猿を引合せ、因縁の事二人して語りつゞくれバ、長者つく〳〵と聞て、横手をはたと打て、果してわがおもふに違ハず、弓矢心のいミしき小猿殿を得けり、中頃落ぶれたりとも、それハ子細ありて、行状の疵にハあらず、第一にハ白糸が約束の夫にて、まことに奇縁

といふべし、いかで家をもゆづらざらん、浄瑠理媛ハ牛若君に参らすれバ、師仲卿の御念願も足ぬべし、されば打もおかず、牛若君の御迎かてら、小猿殿ハ都に登り、親たちに対面ありて、よろづの事告させ給へといふ、やがて小猿ハ旅よそひして、此度ハ本の名の、堀口の里若になりて、正門坊喜三太と共に打連て、都へぞのぼりける、是も晝の錦を着かざりし心地しけり、此時五条堀口か家にてハ、君平夫婦もまだながらへゐたり、里若我家ながら正門坊に案内させて、始終の事どもすへて、此法師に語らせつ、此家の人々ハ、十年の昔となりし事なれバ、矢矧にもまさりて夢のやうにおもひて驚く、されバ廉三も小雪もあらためて、子をまうけたるこゝちせるうへ、ましてありがたき、因縁ともなれバ、何事もすべて、貴僧の御影なりとて、悦ぶ事かぎりなし、さて又矢矧の長者ハ、牛若丸を聟にとり奉り、瑠理君懐胎し給へる事を、師仲卿へ告参らす、また堀口廉三が方よりも、里若がなからへゐて、再会しつる事知らせ奉れバ、師仲卿の御悦びも、またいはん方なし、いづちも〳〵悦あふころほひにぞありける、扨喜三太案内して、正門坊里若の両人、牛若丸の山科をとひ奉る、喜三太御使に下りしより、仕出したる事なけれバ、物いひかねてあるを、正門坊さし心得て瑠理君の今めてたくて、矢矧におハし給ふ子細語参らせ、

扨打かへして東国へ御旅行の後、僧正坊の御側にありしより、仙家の事まで、残りなく語り参らするに、牛若丸も仙術の奇特、瑠理君の貞節など感じ給ふ事大方ならず、里若も初て見参にいり、誠にめづらしき宿世どもにて候と申す、扨都を下り給ひ矢矧におハさハ、木曽との中にはさまりて、よろづ便宜ならんと申す、源三位殿の御企も、まだためらふ頃なれバ、牛若丸も其申旨に同じ給ひ、よろづの支度ぞし□(給)ひける、こゝに不思議なる事のありしハ、かの僧正の仙家の折よりして、百日ばかりにもやあらんとおもふ頃、鞍馬の僧正が谷に、盗人五人手足裂れて、死をりしと聞えけれバ、正門坊いひけるハ、某法師の役に引導せん、かの五人悪党ながら、某ならでハ、誰か教化仕らんといひて、かの寺より死骸を乞受、火葬してけり、是も三河の国に持下て、瑞泉寺にぞ葬りける、その故ハ、姫君の御前生の髑髏、正門坊が持てあれバ、瑞泉寺の瑠理君の空蝉の棺に納めける、其序なりしとぞ、五人の者ども引導の功にや、仙術仏神の御憐にや、皆仏果を得たりしとぞ、三郎が妻のおそのが夢に見えける、おそのハ兄ながらも、松若が悪業をバ悪ミたりしかど、肉縁のかなしくてありしに、此諭に慰めけると、後にぞ聞えたりける、是ハ打置て十二月になれバ、牛若丸矢矧へ下らせ給ふ、やがて二方ともにあらためて、婚

姻結ばせ給ふ、長者か悦び、当日のいつかしき礼儀共に、よの常ならねど、書たてんハうるさしとてもらしつ、牛若丸ハ例の御鏡、媛君ハ横笛とり出給ふ、瑠理君白糸と共に、此鏡見給ふにつけても、互の御顔ばせ、もとのやうになりて、夫に見え給ふをうれしと覚す、長者藤一ハすくに里若に家を譲り、ふたゝび改めさせて、井口の新藤太とぞ名のらせける、扨此師走ハ、御臨月にてあれバ、御産屋の儀式もおろかならず、男の御子生れたまへり、仙寿丸殿とぞ申ける、是よりさき衣の里の別荘を、牛若君の御家にし給ひけり、かくて何事も足らハぬ事なく、浄瑠理媛ハいつ迄も此衣の里にまし〳〵て、めてたうくらしたまひけり、されど世にハ御子の仙寿丸の事をバ、沙汰せず、いかなる故にか、正門坊後に還俗して、仙術を得ながら、武勇の者なれバ、弁慶にならびし軍師にてありける、又井口の新藤太ハ、同しく剛の者にて、是ハ牛若丸に似たりしが幸はひにて、影武者にて、敵を疑ハしめなどして、勝利をぞ得ける、喜三太下ざまの者ながら、堀川にての忠義ハ世に隠れなし、とり〳〵よき臣下ども得給ひけり、たゞし牛若丸の事ハ、此書の浄瑠理媛の因ミにのミ書しなり、されバ御名のりをだに、あらハにハ記さす、憚る事のあれバ、事実の相違ハ、ことさらなる仕業も交り、伊勢三郎が事も、折から頭ら

いたくて物うけれバ跡の事ども書さしつすべて乳母が
物語の事なれバあながちにハ信じがたきもの語りになん
やかて源家興立し平氏ほろびて国土も豊かなりとぞ

浄瑠理媛物語巻五　大尾

編述　東都　六樹園大人閲
狂蝶子文麻呂

畫工　同　喜多川花月
補助　浪速　浅山蘆洲

筆工　同　浅野髙藏